

第3分科会記録

「一人ひとりの子どもに対する多様で公平な評価を考えるー試験における配慮の検討ー」

シンポジスト：玉木宗久（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 主任研究員）

伊藤由美（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 研究員）

原裕子（東京都町田市立薬師中学校 教諭）

海津亜希子（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 主任研究員）

情報提供：渥美義賢（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 上席総括研究員）

司会：海津亜希子（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 主任研究員）

司会の海津主任研究員から、発達障害の子どもの疑似体験を行った上で、本分科会の趣旨について説明が行われた（要項p37 参照）。その後、各シンポジストから話題提供があった。

<シンポジストの報告>

最初に、玉木主任研究員から、文献研究を中心とした諸外国における試験の配慮（テスト・アコモデーション）の現状について説明があった。特に、米国・英国についての文献研究より、①アコモデーションとモディフィケーションの違い、②アコモデーションを規定する法律、③米国・英国の大規模テストにおけるアコモデーションの内容、⑤テスト・アコモデーションの課題について報告があった。

次に、伊藤研究員から、小・中学校の通常の学級で実施されている試験における配慮（テスト・アコモデーション）の現状について、パイロット調査を通しての報告が行われた。

さらに、原教諭からは、中学校におけるテスト・アコモデーションの実践について、①これまでのテスト形式と配慮点、②変更した点、③変更するにあたり苦労した点、④変更したことによって見られた生徒の変容について報告があった。

最後に、海津主任研究員からは、原教諭の学級での実践研究を通して、①子どもへのアンケート調査、②実際のテスト様式、③研究グループが提案したテスト案、④2学期の数学期末テスト、⑤テスト様式の変化に対する生徒の見解、⑥試験における配慮（テスト・アコモデーション）ガイドラインの作成、⑦テスト・アコモデーション実施の条件、⑧テスト・アコモデーションガイドラインについての報告がなされた。

さらに、渥美上席総括研究員からは、試験における配慮の検討として、大学入学試験における発達障害への配慮と、障害者の権利に関する条約についての情報提供があった。

<質疑応答>

質疑応答では、指定討論の渥美上席総括研究員から伊藤研究員や海津主任研究員に質問を行い、伊藤研究員らが答えるなどして、フロアとの協議に踏み込んでいった。

渥美：評価の基準を変えるという視点はアコモデーションか？モディフィケーションか？

伊藤：評価の基準をかえてしまうことはモディフィケーションになると思われるが、例えば漢字の止め跳ねについては、学習指導要領で確認したところ評価の基準とはなっていない。子どもの何を評価するのかによって、アコモデーションになったり、時にはモディフィケーションになることもあると思う。

伊藤：中学校では、高校入試を意識して積極的にアコモデーションをしていない。しかし、現場の教師の理解はアコモデーションとモディフィケーションが混乱していると思

われる。

原：都立入試を意識して、解答用紙と問題用紙を別になっている。実際の高校入試においてどの程度アコモデーションされているか分かっていないが、事例として難聴の生徒や不登校生徒の入試に対して配慮の要請を求めたことがある。ただし、全体として、そのような配慮がどの程度されているかは把握していない。

渥美：日常の達成評価をみるという意味では、アコモデーションとモディフィケーションの意義について？

海津：作文の指導についても、本来の指導目的と付随された指導も多く入ってくる。表現力が豊かな生徒だが、作文の漢字や文字指導のチェックが多くなり、本人は作文が苦手という意識を強くもっている。

渥美：特別支援教育の通知文が既に出ている。

岡山県：ガイドラインの評価について、アコモデーションかモディフィケーションなのか？現場では発達障害に理解のない教師もいる現実があるので、評価については難しい現状がある。

質問として、テスト・アコモデーションは、テストの際の支援と考えて良いのか？支援は基本的に減らしていくと認識しているので、テスト・アコモデーションはテストの際に支援を減らすとと考えて良いのか？

海津：テストにおける支援と言い換えて良いか？

玉木：アコモデーションは支援の一つと考えている。アコモデーションは、障害があって不利な状況になっているので、支援を減らして何とかするというイメージではない。

渥美：テスト・アコモデーションはテストの支援ではないと考える。公平といったことから考えるとアコモデーションは不利にさせない。

しかし、日常的のテストにおいては、支援性があると考えられる。

広島県：中学校の教師とテストについて議論をしたが、中学校では入試があるのでその視点が頭からあるので、議論が噛み合わない。別室入試も本人が嫌がるケースもある。そういった事例も含めて回答が見つからない。

玉木：高校入試に合わせていくことも一つの考えだが、自分たちは、子どもが持っている力を最大限伸ばしていこうとすることを目指している。アコモデーションのやり方は、別室受験だけでなく、他にも色々ある。子どもの特性にあったやり方をみんなで見つけていくことが大事。もちろん、この分野については、まだまだいろいろな考え方があると思うので、少しずつ共通理解していけるといいと考える。

海津：テスト・アコモデーションガイドラインの目的をみてもらうと、実際に検証していく必要があると思うが、定期試験の際は高校入試を想定しているのではないと思う。